

暑さ寒さも彼岸まで 住職 堤 俊翁

今年の夏はことの外、暑い日が続きました。熱中症で倒れた人や亡くなった人もいました。

昔から、寒い日がいつまで続くかなと思っていたのに、春の彼岸を迎えると暖かくなる。暑い暑いと汗をかいていたのが秋の彼岸頃になると涼しくなる。日本の彼岸は季節の変わり目を伝えてくれます。

ところで、「彼岸」とは私達浄土宗の檀信徒にとっては西方極楽浄土という具体的な場所を表しています。

ですから、「彼岸」を浄土と捉えてみると「暑さ寒さも、、、」のことは「暑さを感じるのも寒さを感じるのも浄土に往生するまでだよ。つまり暑いとか寒いといった苦しみも、往生してこの世から離れてしまえばなくなるのだよ」という意味にも受け取れます。

法然上人がおっしゃっているように、西方極楽浄土に往生したあとは、阿弥陀さまのもとで仏になるための修行に励むのです。

ありがたいことにこの世で受けたら感じたりするような苦しみは往生とともになくなり、この世では成就しがたい修行を自在に積むことができるのです。

心の豊かな人は他人の長所が見え

心の貧しい人は他人の欠点が見える

伝えることば

一皿精進

材 料

大豆、、、、、 1カップ
小麦粉、、 大さじ 1 杯
味噌、、、、 大さじ 3杯
胡麻、、、、 大さじ 3杯
砂糖、、、 大さじ 3 杯
みりん、、、 大さじ 3杯

Vegetarian Cooking

揚げ大豆の胡麻味噌和え

作り方

- 1、大豆を一晩水に浸す。
- 2、ザルに上げ、よく水切りをしたあと、小麦粉を薄くまぶす。
- 3、たっぷりの油(中温)で焦がさないようにパリっとするまで揚げる。
- 4、よく油を切ったあと、味噌・胡麻・砂糖・みりんを和える。胡麻は半すり程度に、味は好みにより加減する。



ひとこと

見た目は今一つですが、どなたにも好評で、ビールのおつまみにもよく合うといった声も聞かれます。よく作り方を尋ねられますが、中温のたっぷりの油で、ゆっくり焦がさないようにパリっとするまで揚げるのがコツです。大豆・胡麻・味噌と、栄養価も高いので、皆さまも是非作ってみて下さい。



一、思い凝して

土で器を造り、木で仏を彫ってみると、何を感じるのだろうか。宇宙の塵というべきか、偏在せる毘盧と呼ぶべきか、偏照したる光珠(舍利)と呼ぶべきか、又は元素・原子とか、陽子・中性子・電子と呼ぶべきなのか、これらの物質又は心靈を結びつけて形象あるものとなさしめる力を願業力といふか、祈りといふか、神力といふか、いわゆる空間と時間が交差して今という現実があり連続することに依って生命のいとなみがあることを考える時、この世の不思議さや想ふ時、何らかの親様の在ますことを感せずにはいられない。形象を成してゆく中に一つの法則とその法則に寄せる思い・気持・心という事を認めざるを得ない。

作られた作品に神仏を感じるの、私の一人よがりであるうか。神仏を感じる為に作品を造り続けるのであるとしたら、まさに思い凝して生きているということになる。

このことにより、神仏のこの世に引き続きの思い凝しての力を感じることは出来ないものであるうか。技芸に遊ぶ(生きる)人はどこからこの世に生まれてくるのであるうか。或る人のいふ、天界の伎芸人(伎芸天)のなせる技と、人間のくらしに役立つ道具を作る人は、我等人間への神仏の恵みの心が生みなせる人であると、そのような人の作る物・成せる技を見ることに依って神仏のみ心を識れるものと、人間が眼・耳・鼻・舌・身・

意・の六根・六識・六境という能力を備えて生れて来たということが、思い凝して作品を造り続けることが出来、造り続けることに依って神仏を見ることの出来る道と、活されている生命を深く味わふ為に野菜を栽培してみると、水と光と温度と土と肥料と薬と其の他諸々の条件に依って形・大きさ・色・味等々に差の出来ること。

なぜこうなるのかということとは農産物品評会を開催してみると良く判る。これは人柄が出るのである。ここに人柄こと作る人の思いが野菜には判るのであるうか。人間側から判らないことを野菜が感じた結果であるとしたら人の心はごまかせないものであるということになる。ごまかせない人の心を観るために品物を造り野菜を作らせるとしたら、そこから人間性を観られるとしたら、人はある程度ごまかせても(判る人が少ないから)神仏はだませないということである。見すかされているのに見すかされていない側が気付かないとしたら、これはゆゆしきことである。思い凝してということ大切なり、良く良く思い計るべきのことなり。

一、道

老荘思想に道が説かれ、私も一応書物を求めて読んだ日もある。ある人の曰く「古今道を求めて得られた人はいません。ただ人生を過ぎてふり返った時、そこに道を見出すことが出来るかも知れません。」道を得る為には生きるということが大切なことであると、つまり実行・実践・行を行じ続けるといふ意味のことであるうか。老子の書物を読んでいて、その人の後多が心に見え、自分の想に向って真直に歩く人のだんだん

小さくなってゆく後姿が心に浮ぶ、小さくなってゆくということは、その先の求めているものが、おぼろげに見えてくるような気持にもなる。莊子を読むとその老子のほな歌が聞えてくるような気持になると共に人生の生きてゆく旅路の苦勞を面白味としてみることも出来る。智慧と勇気が湧いて来るのである。

人が生きるということとは何を求めているのかということであり、又、深くはどの様な世界からこの世界に何の為に生まれて来たのかということになるのではなからうか。一人一人の願い・目的が、人類の目的・願いかということ、人生か歴史かということになるうか。人生は歴史となり歴史の中に人生があるということであるが、ここを小説家が色々な資料を集めて思い想いで物語を書いて人間という者を見い出さんとしているとしたら、物語は人に生きる楽しみを与えてくれるのではなからうか。何と書物の多きことか、多きが故に本当に役立つ書物と害になる書物があるのではなからうか。価値の基準は目的に依って異なるのであるうか。伝記物語を読むと、主人公の道があり、

主人公と共に生きる人々が共にこの世に生まれ来て、共に同じ道を歩いたということとに連れ待って生まれ来たのではと考えさせられる。この連れ待って生まれて来たということだが、前世の縁ある人ということを知る為には一人この世に生まれ来て一人生きる人死んでゆくのであるが、人間社会を共に生きてゆく人の出会いがあるという事は、前世での出会いがあつて、その因縁が今生を共に生きることになる果報であると思われる仇・敵・瞞す人・瞞される人・助ける

人・助けられる人、色々の出会いの他人も、私一人の為に用意された人、何かのたいなるはからのものとに準備された人であるのだと受け止めた時、誰が私一人の為に、これだけの多くの出来事を人を営々と成し続けてくれているのであるうかと、この様に思い到ったとしたら、ありがたさの極み、感謝・感激の涙溢れて然るべきであらう。

全ては生かされたことであると、この様な思いに到り、感謝報恩の気持で生きていく人は昔から今も数限りないであらう。千年という時も地球が二十四時間程で一周し、三六五自転して太陽を一周する。宇宙の拡がり四週に一周して潤年として調べて千周のことである。

人は何周出来るのであるうか、何年生きたと思へども、何周したただけのこととも言える。軌道・黄道と地球・太陽の動いた跡を呼ぶが、目に見えない力が働いていることの跡であり、ここで道とは目に見えないが確かに働く力のことであると言える。

自然界・宇宙は目に見えない力に依って成り立っている。

この力を道とも法とも呼ぶべきであらう。この力を求める心を求道心と呼び、老子はこの力(心)に引かれて旅立ったのではなからうか。その後姿しか心に見えないということとであらう。旅立つ前のことばは決心への心の過程であらう。読む人は、この心の有り様に学ぶべきを見い出すのであらう。

私は心の有り様より旅立つ先にあるものを求めるだけである。私には、そはみ仏と見える僧として信仰があるだけである。